

灰落パラダイム



何もかも白かった。

白い空に浮かぶのは、白い太陽を隠す白い雲。日差しはレンガの道を白く焼き、照り返す光は壁を白く塗りつぶす。ふおん、ふおん、と規則的な風を送るのはこの街の象徴である風力タービンの音。三つの細い翼は止まることなく続いている。

街の終わりには人の高さほどの白い壁がせり上がっている。その向こうにはなだらかな絹のような海が広がっているが、塀を越えなければ見えない。だがこの海は何も生産していない。魚も貝もなく、海鳥もいない。無音の水が広がっているだけなので、それを見ようとする人はいなかった。一人を、除いて。

シロは猫であり、まだ年端もいかぬ少女でもある。身軽な体でひょいと塀に登り、幅わずか二十センチほどしかない道に両手足を乗せた。恐る恐る立ち上がり、両手を広げる。天使のような白い髪がふわりと揺れ、風と馴染んだ。

ゆっくり、ゆっくり。一步一步踏み出す。足を出す度に心が躍り、いつしか小走りに塀の上を歩いていた。

万華鏡のような光彩を放つ瞳は、白い空と永遠の風力タービンを映し出す。毎日見る同じ光景。同じ景色。同じ風。ここは決して変わることのない街。この塀は風力タービンと同様、永遠と普遍を表しているようだった。決して逃さない、何かがあった。

シロは何も知らず、走った。海を見たいわけではない。風力タービンを見たいわけでもない。この街で一日を過ごし、少しだけこうしたスリルを味わい、楽しみたいだけ。シロはただ楽しくて走った。

風が耳を通り過ぎる。髪をすり抜け、腕をすり抜け、指から消えた。くすぐったくなり、シロははにかむ。そうした瞬間、平和と幸せを味わうのだった。

そう。この街は永遠。永遠の幸せだけで満たされている。シロにとって悪意あるものは全て排除された優しい街。ありのままのシロを受け入れてくれる、白い街。

だからシロは猫だった。猫のように気ままで、気まぐれで、時々悪戯や意地悪をして遊び、甘え、ミルクを飲んだ。シロは猫だ。その口は食べ、感情を表現する以外はしない。言葉はなかった。それでも通じるし、必要はない。何度も繰り返すが、シロは猫なのだから。

シロは塀から降りると、街を見渡しながら歩いた。凹凸のあるレンガの道は歩きにくく、時々躓くが、整然と並んだ姿はこの街にじっくりくる。まるで絵画のように、水平の線は一点で消失する。

その先にはこの街唯一の出口があった。塀で囲まれた街は道はあれど、出口はない。ぐるりと囲まれ、外には出られない。だがシロの見つめる先に、ここから出るための――いや、入るための門がある。そこは常に解放されており、その先には真っ直ぐ伸びた白い道がある。

シロはここから出たいと思ったことがないため、その先に何があるか知らないし、これからも知ることはないと思った。

シロはかぶりを振ると、家へと帰った。家、といっても自分の家ではない。飼い主であるクロが住んでいる小さな白い家。ウエハースでできたような、愛らしい作りをしている。

クロは家にいるだろうか。絶対にいるだろう。

クロはシロと違って、家にいるのが好きだ。一日中家において本を読み、ソファで眠っている。

今日はどんな悪戯をしてやろうか。シロは一人笑うと、家へと急いだ。白い太陽は真上を覗いている。

クロは探偵と名乗っている。なぜかと問われると、こう答えるしかない。

何もないから。

何もないから探し、探しているうちに、探偵呼ばれるようになった。探偵とはいえ、仕事はほとんどない。大抵の場合は本を読み、寝ている。

クロは名前の通り、真っ黒だった。髪も瞳も黒く、服も黒い。上下とも黒いスーツだが、随分とくたびれていた。気まぐれな少女、猫であるシロはその恰好を責めるが（彼女は猫であるため、しゃべらないので目で言った）クロはこれ以外の持ち物はないし色が付いたものは苦手なので、結局はこのスーツを着ている。

ただ、いつからこのスーツを着ているか知らない。何もないクロ。最もないものは、記憶だ。

なぜここにいるのか、まるでわからない。気がつけばここにおいて、本を読んでいた。そうしているうちにシロが迷い込み、一緒に住む……というより、住処を提供しているという感覚に近い。飼い主とそのペットという関係で間違いないだろう。それを不思議に思ったことはないし、止めようとも思わない。それにシロは手がかからない。自分で大抵こなすが、悪戯好きなので時々困る。その程度だ。

なのでクロの持ち物は服と本、そしてシロ。唯一——記憶を示すものが一つだけある。

もう使えないであろう、鉛色をした銃弾が一つ。何も入っていないディスクの引き出しにころりと入っている。そこには十字の傷と、「私は忘れない」という言葉が刻まれている。私、とは誰のことかわからないが、忘れない、という言葉はクロを酷く安心させた。

この銃弾の意味がわかった時、どうなるだろうか。ふと考えがよぎるが、それはすぐに消える。

なぜなら、クロは平和であり幸せだからだ。何もない穏やか過ぎる日々が心を落ちつかせる。争いはもちろん事故すらない、白い街。風力タービンだけが動き、後は全て制止した平和な世界。

クロは本をテーブルに伏せると、腕を枕に仰向けになった。天井は掃除をしたことないにも関わらず、白い。埋め込まれた蛍光灯は少し黒ずんでいるがまだ使える。今は昼間なので電気はい

らない。部屋は十分な光で満たされている。

夢の淵に立った時、鈴の音が聞えた。クロはうっすら瞼を開けると、シロが飛び跳ねている所だった。慌てて声を出そうとしたが遅く、シロの華奢な体はクロの腹を直撃した。

「シロ……」

クロは呻いたが、シロは笑って見下ろしている。両手を嬉しそうに動かし、乗ったまま跳ねた。鳥のように軽い体をしているシロだが、それでも重いしこのように動かされては体も痛む。クロは無理矢理起き上がり、シロをどかした。

「遊んでほしいのか？」

聞くまでもなく、シロはクロの腕に絡みつき、頬を擦り寄せた。

「何をしようか。ネズミのおもちゃ？チーズのパズル？」

シロのおもちゃ道具が詰まった箱を取り出し、いくつか出す。床に並べると、シロは選ぶことなく次から次へと遊んで、散らかしてしまった。

クロは特にきれい好きというわけではないが、片付ける事を考えて面倒な気持ちになった。だがシロがあまりに楽しそうに遊ぶので何も言えず、眺め続けた。

七色に光るシロの目がちらりとクロを見た。はにかみ、またおもちゃに熱中する。

何もないクロに何も語らないシロ。もしかするとシロは何かを知っているのかもしれないと思うこともある。だが、クロは永遠に聞かないだろう。

聞いてしまったら、幸せが崩れてしまいそうで……。

アザレという男は犯罪者だ。

十を迎えた辺りから自分の性癖に気づき、数年経つうちに立派な犯罪者となっていた。アザレはそれが悪いことだと知りながらも、やめなかった。やめてしまったら欲求は満たされないし、やってしまったらそれまでだ。戻ることはできないので開き直すしかない。とはいえ、アザレの行為は立派な犯罪であり、彼がどう言い訳をしようと関係なく捕らえられてしまう。故にアザレは逃げる事しかできなかった。

繰り返される犯罪と欲求。満たされることなく繰り返し、繰り返し――そうして辿りついたのがこの白い街だった。

まるで何もない街では唯一、風力タービンだけが動いている。なんとも言えない、暇すぎる、白すぎる街だったがアザレは気に入っている。

なぜなら、ここでは堂々とアザレの欲求を満たしていいからだ。むしろ、それを条件にここにいる。だからこの街はアザレを幸せにしてくれる、楽園のような場所だった。

葉が崩れかけた紙巻き煙草をくわえながら、アザレはとある場所へ向かった。白い煙と粉が舞うが、誰も文句は言わない。そういうところも気に入っている。

白いレンガを蹴りながら進み、道すがら一人の女に遭遇した。見知った顔にアザレは笑顔を作った。もっとも、彼女には意味のないことだが。

「ヴェルミヨン、珍しいな。散歩か？」

気安く声をかけると、女は優美なくちびるをつり上げた。水にぬれたような質感が妖艶であり、鼻も高く通っている。整ったパーツたちは透きとおる白い肌の上で輝いていた。しかし残念な事に、その上にあるはずの両の目は閉ざされ、白い絹のバンダナで塞がれている。もし彼女に目が健在であれば、完璧に美しいとされたかもしれない。それでも彼女は絶世の美女であった。

ヴェルミヨンは立ち止まると、腰まで届く黒い髪をかきあげ、見上げる仕草をした。その先にはアザレがいるが、彼女には見えていないはずだ。それでもしっかりと見据える。

「アザレ。そっちこそ珍しいね。買い物かい？」

「いや。ちょっと野暮用でね。呼ばれてるんだ」

「そうかい」

ハスキーな声にどこか蓮っ葉な口調で素っ気なく言うと、口の端で笑みを作った。

「あたしはその通り、買い物さ。新しいドレスが欲しかったけど、いいものがなくてね。サテンでできた赤いドレスが欲しかったんだけどねえ」

「それは残念だったな。今度見たら教えるよ」

「おや、優しい」

「教えるだけで買ってはあげないけどな」

ヴェルミオンは肩をすくめると、そのまま通り過ぎてしまった。小さい街だ、またすぐに出会うので別れの挨拶はいらない。

アザレは横目で揺れる腰付きのヴェルミオンを見送り、煙を吐いた。その口元にはにったりと歪む笑みがあった。自分でもわかるほど、筋肉が収縮している。心はどこか、餌を見つけた獣のような高揚感があった。あるいは、支配欲とでも言おうか。もしくは、それとはまったく真逆――過ぎ去った栄光を見るような、映像を見ている感覚か。それに浸っているとでも言うのか。複雑だが元を辿れば、愛に近いかもしれない。

アザレは煙草を捨てると、靴底でなじった。煙のようにヴェルミオンの姿はもうない。

ヴェルミオンは異常なほど美しく、異常なほど自分の美に固執していた。

彼女は願った。ずっと願っていた。切望していた。永遠の美貌を。

今のままの姿を永遠に留めておきたかった。老いていく事が恐ろしく、次から次へと現れる女たちが恐ろしく、自分の美も疑わしくなり、ついには発狂寸前まで追いつめられていた。

欲求を満たしたいと徘徊するアザレはそれを求め、彼女はそれを望んだ。

アザレはそれを叶えた。周りを見ないように。自分を見ないように。記憶にある自分の姿だけを頼りに、それが唯一の幸せとばかりに、それを選択した。

目玉をくりぬいた。ただそれだけの行為。

結果、ヴェルミオンに笑顔が戻った。彼女の美はこうして永遠を保つこととなったが、アザレの知るところではない。アザレは通常の男と同じくらい女を好いているが、それ以上の興味は

ない。美しかろうが醜かろうが、関係ない。まして、そこからそこへと至る過程はもっと興味がなかった。

だが愛はある。ヴェルミオンはアザレの欲する目玉を持っていたのだから。だからもしかすると、ヴェルミオンを愛しているのかもしれない。それが両の目であるか、彼女自身かはわからないが。

――久しぶりに覗いてみよう。

永遠を得るための代償となった鮮紅色の瞳は、アザレのコレクションケースで眠っている。

消毒の匂いが鼻をつく。すでに慣れているはずなのに、それは思い出すかのように時折刺激した。

グロゼーユは頭を軽く振ると、ナイフを置いた。銀色の細身のナイフにはべっとりと血がついている。異様に細長い指先や腕にも点々と滴っている。

血の臭いは苦手だ。吐き気しか覚えない。それでも、やらなくてはならない。同時に、やりたくてたまらない。喉の渴きを覚えるように渴望する自分がここにいる。グロゼーユは水の代わりに酒を舂め、少しでも潤うようにとゆっくり喉に流しこんだ。すると血の臭いは薄れ、代わりにアルコールの匂いが部屋に満たされる。安堵していく自分に安心していく。

グロゼーユは切るという行為が大好きだ。人の肌をぷつりと刺す瞬間がたまらなく好きだ。風船を割るように、刃を入れた瞬間裂ける皮膚や肉に快感を覚える。人体に美を覚えるとでも言おうか、背筋を舂められたように歓喜があがった。

だがそれも一瞬。非常に残念なことに、その後すぐにせり上がる血は大嫌いだった。色もだが、どろりとした液体というところも臭いも何もかも嫌いだった。快感は数秒も立たず消えてしまう。それでもナイフを止めることができなかった。

それに、今となってはこの行為はグロゼーユの仕事でもある。

白い街に来るまでは、この欲求は犯罪という名の元で行われていた。肉に飢える獣のように夜をさまよひ、切り刻んだ。しかし血の臭いで嫌になり、逃げるように刻んだ肉体を捨てて帰る。そうした、どうしようもない罪の日々を送っていた。

犯罪と知りつつも悦楽を味わいたい。一般的な性欲と変わらないそれがせり上がる。それを非難するべきか。人の肉体や魂は厄介なもので、それらに手を出せば必然と犯罪と化す。グロゼーユはそれが理解できなかった。他の人たちが女を求めるように、人の肌を切り刻むという行為も受け入れてくれればいいのに、と思っていたそんなある日だった。

アザレという男が現れた。年齢はグロゼーユと対して変わらないだろう。中肉中背、背丈もグロゼーユと変わらないがどこことなく威圧的な体をしている。肩幅が比率に比べると少し広がっているせいだろうか。彼の特徴というのはそれくらいなもので、特に印象に残るものはない。ただ、赤味がかかった紫色の瞳がやけに輝いていたのを覚えている。

彼は異様なほど人懐っこい人だった。初対面にも関わらず、ぺらぺらと自分の事を言った。グロゼーユはそういった人間を苦手とするが、彼もまた自分と似たような性癖を持っていることを知り、単純な話だが共通の趣味を持つ友が現れたように思ってしまった。

アザレは明るい。対する自分はしゃべるのもおっくうな根暗な性格をしていたが、それでもウマは合った。性癖だけでなく、通常の会話も合うことは滅多にない。

そんな彼に誘われて来たのがこの白い街だった。

到着後、すぐに依頼が来た。人間を解体してほしいとの要望が。グロゼーユが望まずとも、肉体は次から次へと手に入った。好きなだけ切り刻めるという願いが叶った瞬間だった。体が暖かく満たされていくのがわかる。

そして今日も肉体を切った。いつもは皮膚だけだが、今回は目玉も抉ってある。

「おおい、グロゼーユ」

呑気な声に顔をあげる。案の定、アザレが扉を開けるところだった。ノックはない。グロゼーユはアザレをねめつけると、下から上へと視線でなぞった。決して苛立っているわけではなく、癖だった。以前、アザレにやめろと言われたが癖というものはそう簡単に直せるものではない。

「いいのが入ったって聞いたけど？」

「ああ。お前の好きそうな色だと思って。この肉体は破棄されるから。その前にとまって連絡した」

グロゼーユは無愛想に答えると、たった今摘出したばかりの目玉が入ったホルマリンの瓶を放り投げた。アザレは慌てて両手を広げ、それをキャッチした。投げたことに文句を言いたそうだったが、その顔はすぐに満面となる。なのでグロゼーユも思わず口の端をつり上げた。

「ターコイズの目。欲しがってただろ？」

「すごいな……！本当にターコイズだ！すごいな……」

アザレはしきりに「すごい」を連呼し、瞳を輝かせる。二十代も半ばに入っているというのに、この時ばかりは少年の顔になる。普段はくたびれた中年のようなのに。

「ありがとな。早速コレクションケースに入れておく」

「どうぞ。目は不要な部分らしいからな。捨てるのも勿体ないし、貰ってくれるとありがたい」

「そうか。じゃあ、次はカナリア色の目が入ったら教えてくれ」

「カナリア……随分と難しい色だな。あんまりどころか、ほとんど見た事ない」

「俺も。だから欲しいんだけどな。本当はシロの目が欲しいんだが、クロの奴が睨むからなあ……。中々、コレクションが埋まらない」

言っ、アザレは肩をすくめる。実はこの場は凄惨な現状なのだが、彼は死体ではなく酒瓶を指さした。

「また飲んでたのか？俺も誘ってくれればいいのに」

「血の臭いは嫌いだ。アルコールで誤魔化しながらじゃないと、長く解体できない」

「難儀だな」

アザレは苦笑したが、それだけだった。

「でも相手がいない酒もつまらない。アザレ、この後は」

「そうこなくちゃな。もちろん、暇さ。俺はいつだって暇。そうだろ？」

今度はグロゼーユが肩をすくめる番だ。

「その前に、悪いがマザーに報告しなくちゃいけない。付き合ってくれるか？」

「もちろん、とは言い難いけど、さっさと済ませろよ。俺はあのおばちゃんが苦手なんだ」

「了解」

グロゼーユは手袋をはずすと、わずか残る酒を飲みほした。血の臭いは消毒され、甘ったるい酒の匂いに変わる。ようやく心が晴れてきた。

二人は何も言わず外に出る。白い街は今日も穏やかに、風だけを紡いでいる。

エイプリルはちょっぴり嘘をつくのが好きな少女だ。

学生なのだが、学校には行っていない。病弱と偽っているからだが――病院と似たような場所に通っているので、本当に些細な嘘だ。

この嘘にはルールがある。それはエイプリルにしかわからない、微妙なライン。病弱、というのは嘘に入らない。実は男である。それも嘘に入らない。いちごが嫌い。これは嘘だが、言わない。嘘は最大で五つまでと決めているからだ。それを知っている人はほとんどいない。

エイプリルは歌うのが好きで、日差しをたっぷり浴びるのが大好きだ。ステップを踏むたびに黒く長い髪が揺らめき、影が膨らむ。それが楽しくて、また跳ねる。

だからだろうか、猫だと思い込んでいる少女、シロと仲がいい。シロはまだ十歳そこそこの子ではあるが、気ままで気まぐれな所が一致し、出会えば必ず一緒に行動した。

「シロ。最悪なんだ。今日はマザーと会わなきゃいけない。面倒だよなー。ワタシは元気だっのに」

シロは神妙な顔で何度も頷く。エイプリルに激しく同意しているようだ。そんなシロの顔を見て、エイプリルは満足そうに頷く。

「いや、わかってるんだよ。マザーはワタシじゃなくて、もう一方を気にしてるんだから。ワタシが元気なのは当たり前だし、ワタシが元気じゃないと意味がない。それくらいわかってるけど……」

シロはその続きを知っているように、やはり頷いた。あまりに懸命に頷くので、エイプリルはつい嘖出してしまった。

「そうそう。それくらい、マザーは苦手って事だよ。シロも？」

シロの首は止まらない。そろそろ酔ってしまうのではと思ったところで、シロの体がふわりと倒れかかった。天使のような白い髪が揺れ、エイプリルはその頭ごとキャッチする。

「頷きすぎだよ。でもそうなんだよなー。気分悪くなるくらい苦手だ」

シロを起きあがらせると、少女はそのままどこかへ駆けだしてしまった。気まぐれなのはいつものことなのでエイプリルは大して気にしなかった。通り過ぎゆく風が長い黒髪を攫うので指を添えた。

マザーと呼ばれる人物がいるのは街の中心にそびえたつ、白く細長い塔の最上階にいる。風力タービンよりは小さいが、毅然と建つ、凹凸のないのっぺりとした柱のような塔は、確実に街を支配していた。ここに住まう支配者、マザーもまたこの塔のような存在であった。

エイプリルは足取り重く、中心へと向かう。せめて誰か一緒であれば多少紛れたかもしれないが、シロは気まぐれ、クロは家から出ない、アザレとグロゼーユは子供を相手にしない。ヴィルミヨンは捉えどころがなくて苦手だ。となると、始めから一人で行動しなければならないことは明らかだった。

それに、マザーの所に行くのはいつものことだ。今更億劫になっても仕方ない。エイプリルは自分にそう言い聞かせると、塔に入った。

塔の一階は広いラウンジのようになっているが、誰もいないし店もない。単なる丸い広場に草が生えた程度のソファが置いてあるのみだ。受付もなく、ぽっかりと空いたエレベーターは口のようだった。

エイプリルは磨き抜かれた大理石の床を靴を鳴らして歩き、エレベーターに乗り込むと、最上階しかないスイッチを押した。その他部屋は沢山あるはずなのだが、降りることは許されなければ、ボタンすらない。ということはどこかに秘密の出入り口がある……と思うのだが、見つけようとは思わないし、それ以上何か思うことはない。

思うことは罪だ。考える事で罰が下る。

エイプリルには使命がある。エイプリルはこの体と心を守る役目がある。もし「彼女」に負担がかかるようなことがあっては、エイプリルは消される。マザーに会う以外、全て幸せでできた日常を壊されてしまう。それだけは嫌なので、好奇心を消して最上階へと向かう。

ベルが鳴り、扉が開く。エイプリルは慣れた足で目の前の部屋に立ち、ノックをした。

「開いてるわ」

妙に色気のある声だが、開いた先にいるのは、脂を包んだ中年女性。薄くなってきたブロンドに青い目、脂肪でたるみながらも機敏に動く――いつも通りのマザーだ。

マザーはフレームの細い眼鏡を手の甲で直すと、睨むようにエイプリルを見た。

「遅刻よ」

「悪かった」

「女の子がそんな口調をしてはだめと、何回言わせるの」

「すみませんでした」

抑揚なく、淡々と会話が進む。いつも通りなので、二人はそれを挨拶として、マザーは本題へと入る。

「調子はどう？」

「ワタシはもちろん、絶好調」

「千春の調子を聞いているのよ、エイプリル」

「今言おうとしたんだよ。もちろん、千春の調子もいい。ワタシの中で、楽しい学園生活を送ってる夢を見ている。記憶がぶり返す事はないし、いつも通りの日常を送ってる。今日はテストだって、友人と笑ってるところさ」

「そう」

マザーは素っ気なく頷くと、カルテらしき紙に記入した。エイプリルはようやく近くにある丸椅子に腰かけ、かたかた揺らした。

「擬似二重人格の実験は成功というところかしら」

「さあ？でも現実を歩いているのはワタシで、本物本体の千春が眠って夢見て幻の現実を見ている。妙は話だ」

「あなたに聞いているんじゃない」

独り言は心の中でしろ、とエイプリルは内心毒づくがそれを口にはしない。マザーは怒ると怖いし、エイプリルは偽物の人格なのですぐに封じ込められてしまう。

「あなたは千春を守る人格のみでいればいい」

「わかってるよ。それがワタシの生まれてきた意味なんだから」

エイプリルは体を持たない。意識と人格のみでできた、擬似的な人であり、形のない存在。

その存在を持って、この体の本当の持ち主である「千春」を守っている。

千春はとある事件で心に酷い傷を負った。それは現実を生きるにはあまりにも酷で、このまま行けば死ぬところであった。それを助けたのがマザーであり、そこで誕生したのがエイプリルだった。エイプリルは千春の辛い記憶を請け負い、千春はただ幸せな日常を過ごす。所謂一重二重人格のようなものだ。辛い記憶をもう一人の「自分」に押しつけければいい。

エイプリルはそのためだけに誕生したので、千春の辛い記憶は特に何の感情も浮かばせない。そうした記憶防御に特化している。

「それでも、難点はやはりそこね。本当なら、本体が表であなたが裏でこっそり記憶を請け負えばよかった。今後はそこを強化していきましょう」

エイプリルは何も言わなかったが、それはつまりエイプリルから現実を奪うことになる。それだけは怖い、何も言わない。言ってしまうとそれこそ消える運命を辿ることとなる。

エイプリルは今、幸せだ。たとえ人格しかもたない存在だとしても、こうして存在し、自分の意志で歩いて行動して楽しんでいる。それがたまらなく嬉しい。そして本体である千春も幸せな夢を見ている。

逃げまどう両親を目の前でなぶられ、しかもそのまま、両親は意識のあるまま、目玉を抉られるという事実なんて全て忘れて。

「わかった。今日はもういいわ」

「え、本当？」

「.....近いうちに、あなたに妹ができる。欠落し、幸せになるにはあなたのタイプが一番いいみたいだから」

それはつまり、もう一人「自分」が生まれるということか。僅かに生じた不安を外に出さず、エイプリルは悪戯じみた笑顔を浮かべてみせた。意味などないが。

「楽しみにしてる」

エイプリルは嘘をついた。でもそうして決めたルールを破り、今まで沢山嘘をついてきた。嘘つきだから、笑ってごまかして、千春を守る。会ったこともない、自分の主である少女を。本当のエイプリル——千春を。

エイプリルはそのまま背を向けると、エレベーターのスイッチを押そうとした。すると、扉は勝手に開いた。タイミングがいいと思ったのもつかの間、見慣れた二人組が同時に出てくる。

「アザレ！」

エイプリルは見上げると、くたびれた中年にも見える青年を睨んだ。嫌いではないが、彼は時折狂った部分を出す。だから苦手だ。

「おうおう、エイプリル。大変だなあ、今日も検診か？」

「ふん。おかげさまで超元気さ」

後ろからもう一人、影の薄い青年が出てきた。水のような青い瞳に流れるような薄墨の髪。細身の体と無愛想な顔はよく合っているが、冷たい印象しかでてこない。それはアザレと並んでいるせいだろう。より強く感じる。

グロゼーユは特に挨拶なく、ただ目配せるとエイプリルを通り過ぎ、マザーへと向かった。

「どーなんだよ、解体ってやつ」

エイプリルはグロゼーユの背を追いながらも、目をアザレに向けた。赤茶けたレンガみたいな髪は不潔に見えるが、目だけはきれいな色をしている。

「さあな。俺の管轄じゃねえし。ただ、いい目玉を貰った」

「それはよかったね。……よくもワタシの前でそれを言えるよ」

「でもお前じゃない。もう一人のお前が知れば、ダメージになるんだろ？」

「失礼だよな。ワタシが全部記憶を持っているってのに。ワタシだって吐き気ぐらい覚える。そういう無神経な所が死ぬほど嫌いだ」

「そいつは悪かった」

などと、微塵も思っていない様子で歯を見せた。エイプリルは途端に気分が悪くなり、その場から去った。アザレもグロゼーユもマザーも声はかけなかった。

白い街に戻り、白い空を見上げる。耳を澄ますと、風力タービンの音がした。

エイプリルは目を瞑りながら、ゆらりゆらりと記憶を漂う。

「千春の両親の目玉を生きたまま抉ってさ。しかも千春の目の前で殺して。トラウマにならない方がおかしいっつーの」

誰に言うわけでもなく、つぶやく。そんな記憶を持っていても、覚えていてもトラウマもなければ発狂もしない。自分であって他人である記憶は不快だが、今が消えるよりは随分とましだし、おかげで生まれる事ができた。

「感謝するさ。狂っていても」

だが生誕を喜んでいいのだろうか。生まれなければ何も知らずにいれたかもしれない。

それは例えば――全ての記憶を手放したクロのように。あるいは、そんなクロと共にいる、全てを覚えているシロのように。

みんな欠けている。不完全で、不健康で、幸せだ。

「ワタシは、幸せ」

口に出すと、声はすぐに白い街に溶けた。

塔の管轄者であり、街を制御する女をみんな、マザーと呼ぶ。本名はあるのだが誰も知らない。本人も名乗らないし、誰も知ろうとは思わない。ここは白い街、それがなんであろうと疑問に思わない。

それに、彼女は文字通り「母親」である。特にエイプリルにとっては母親と言ってもいいだろう。彼女の人格を生み出したのはマザーだ。だが母親としての感情はなく、エイプリルも千春も単なる結果としてだけ見ている。その冷たい温度はお互いなので本人たちも周りも気にしてはいない。白い街には何も浮かばない。だからこそ、ここは幸せに包まれている。

全ての母親は書類を机に投げ出し眼鏡を直すと、入ってきた二人の青年に目をやった。一人はやさぐれた中年のような、薄笑いを浮かべる男。もう一人は針金のように細く冷たい、無表情の男。外見も内面も対照的である二人は仲が良い。あまりにもかけ離れているというのもあるが、それ以上に彼らは趣味が似ていた。その一点に置いて、二人は異様なほど一致していた。

だがマザーには関係ないことだ。彼らは自分たちの心を満たしながら、こちらの命令を聞いていればいい。マザーが望むのはそれだけだ。

そのため、二人を前にしても思い浮かぶ感情はなかった。実験が終わったのだな、と思うだけだった。

「グロゼーユ。報告してちょうだい」

「あまりいい体ではなかった」

「以上？」

グロゼーユは軽く頷く素振りだけ見せる。抑揚も感情も薄いのが、そういう所をマザーは気に入っている。無駄がないため、時間を犠牲しなくていいからだ。必要なことだけやればいい。

「わかったわ。今度はもう少し若い人にしましょう。やはりエイプリルくらい若くないとだめね」

「次の解剖は」

「近いうちに」

「わかった」

報告は、二人が頷き合った瞬間終わる。二人を繋いでいた視線は途切れ、あっという間にお互いの存在が消える。グロゼーユはぼんやりしているアザレに近づき、エレベーターに乗って帰る

。マザーはそこに立ったまま、二人に興味を示すことなく、書類を見つめる。真っ白な紙に印字された字は雨粒に似ていた。

マザーは顔を下ろす。たるんだ肉が頬と溶けあう。同時に息が漏れ、静寂は少しだけ途切れた。

白い街の人々は欠落している。みんな、みんな、何かを失っている。

だが幸せだ。みんな笑っている。

記憶を失ったクロは本を読み、シロと遊んでいる。猫であると信じるシロは言葉なくとも、気ままに暮らしている。アザレとグロゼーユは欲求を満たすためにわざわざ人を狩りにいかなくとも、こうして実験体を切り刻むことができる。ヴェルミヨンは目を失うことによって己の美を永遠にした。そして、我が子でもあるエイプリルもまた、千春という少女の記憶を請け負うことで生まれ、現実として生きている。

全て幸せ。白い街が生み出すのはただそれだけ。平穏すぎる風がそれを証明してくれる。

そんな幸福を手に入れる、新たな住民がもうすぐ到着するだろう。グロゼーユの解剖を経て、幸せに辿りつけるかは謎だが。その前にアザレが目玉を奪ってしまうかもしれない。二人は案外と見境がない。

だがマザーにとってそれらも興味の中に入っていない。注目すべきは実験体である彼らたち。その彼らが生み出す結果だけが全てだ。

さて、次に生まれ出る幸福な人を何と名づけようか。白濁する臉にあらゆる字を浮かべる。そうしている瞬間だけ、マザーは人間と近い感性を取り戻す。

マザーもまた、幸せであった。

風力タービンが規則正しく回っている。しかし風は不規則に漂い、匂いを、人を運ぶ。シロは塀に座ったまま、ぐるりと白い街を眺めた。白い太陽に照らされた道は白い壁に反射し、さらに白光する。何もかもが白く消えていく。「ねえ。あなた、この街の人？」白濁と入り混じる中、唯一の色が見えた。シロは急いで顔をあげると、首を傾げた。そこにいるのは、十四、五歳くらいであろうか、エイプリルより少し年上の、見知らぬ少女が手を後ろに組んでシロを見上げていた。人形のように愛らしい姿をしている。頭高くに二つに結った茶色い髪にはリボン、丸い瞳はハチミツのような色をしていておいしそうだ。わたがしのようなピンク色の服がよく似合い、さらに愛らしさを引き立てていた。しかし残念なことに、ふっくりとした小さなくちびるは不機嫌なのだろうか、すぼまりながらへの字を作っている。少女はしばしシロを観察すると、にこりと笑った。人懐っこい、天使のような柔らかい顔だ。「私、マリア。街に来たばかりなの」マリアと名乗った少女はさらに笑顔を咲かせる。まるでそこだけ黄金色に輝いているようで、シロは思わず目を細めた。「この街のこと、教えてほしいの。ねえ。あなたの名前は？」

言われ、唐突な出来事にシロはしどろもどろに手を動かし、どうしていいかわからず目を泳がせた。シロは猫だ。猫はしゃべれない。名乗れない。どうすることもできず、シロは塀から飛び降りると急いで走って逃げてしまった。後ろで少女が何か言っているが、シロは聞こえないふりをした。なりふり構わず走っていると、固い衝撃に襲われた。目の前が一瞬スパークし、意識も感情もごちゃまぜにひっくり返った。体も倒れそうになると、大きな何かシロを支えてくれた。「シロ？何をしてるんだ」低く落ちついた声は毎日聞いている、飼い主の声。シロはまたも目を回したが、それがクロだと認識すると急いですがった。理由もわからず抱きつくシロをクロは優しく抱き上げると、赤ん坊をあやすように背中を撫でた。クロの匂いがシロを満たす。するとどうだろう。心が徐々に落ち着いていった。「どうかしたのか？」シロは体を離すと、こくりと頷いて後ろを横目で見ると、クロも誘われるように視線を動かすと、口を開いた。「もう。いきなりどっかっちゃうんだもの」「……君は？」「そういうあなたは？私はマリア。この街には来たばかりでよくわからなくて。だからその子に案内を頼もうかと思ったんだけど、逃げられたの」マリアは少しも怒った様子もなく、ただ肩をすくめた。しかしシロはクロの背に隠れ、こっそりと伺うだけだった。シロは少しだが人見知りの気がある。クロはそれを知っている、それにマリアも気分を害した様子はないので、飾ることはしなかった。「それは悪かった。こいつは猫なんだ。だからしゃべれないし、気まぐれだ」「猫？」マリアは興味津津にシロを見たが、シロはひたすら頷いてそれを肯定し続けた。幸いといっていいのか、この白い街のおかげなのか、マリアの興味はすぐに消えた。だが、甘い色をした瞳はシロへの疑念が浮かんでいた。それをシロもクロも見ないふりをした。白い街で余計な詮索はしない。「マリア」白い道に細い影が浮かぶ。聞きなれた声にシロはぴくりと耳を動かし、ようやく少しだけ顔を緩めた。クロも少し安堵した息を吐くと、少女の名を呼んだ。「エイプリル」黒い髪が透明な風に攫われる。エイプリルは鬱陶しそうに手で押さえ、もう片方の手ではためくスカートを押さえた。三人を見るその顔は不機嫌そうに歪んでいる。いつもなら明るく勝気なはずの顔は、今は複雑そうだ

った。珍しかった。 風が止み、エイプリルはため息を零した。シロとクロを見やってからマリアを見て、さらに肩を落とした。「マリア。勝手に出て行くなって言われてるだろ。怒られんのはワタシなんだからな」 幾分かきつい口調で諭したが、マリアは素知らぬ顔で、如何にも愛らしいという表情を浮かべた。エイプリルはますます苦く顔を歪め、マリアは目をくりくりと動かした。「だってお姉ちゃん。これから住む所なんだもん。ちゃんと自分で確認したかったの」「後でいくらでも案内するから。とりあえずマザーの所に帰ろう」「エイプリル。君の知り合いか？」 クロを見上げるエイプリルはいつもより覇気のない、力の抜けた苦笑いを見せていた。いつもなら快活で少年のようなのだが。「悪い悪い。説明しないとイケないよな。こいつはマリア。引っ越してきたばかりの、ワタシの妹なんだ」「妹？」 思わずオウム返しするのも無理はない。エイプリルは端正な顔立ちだが、マリアは小鹿のような丸い顔立ちをしている。顔立ちはもちろん、性格もまるで違うようだ。似ている点は見当たらない。それほどかけ離れているが、エイプリルはもう一度「妹」とつぶやいた。幾分か、悲しげな様子で。口の端からちらちらと、儂い言葉が零れた。「ワタシにとって……っていう意味かな……。同族っていう意味の方が近いかも」 白い街に住む人は何も知らない。知らないからこそ幸福に満たされている。 なので、クロはエイプリルの事情を知らない。エイプリルが仮初的人格であり、千春という基盤があるという事実を知らない。なのでそれ以上説明できず、エイプリルは黙った。クロもそれ以上聞かず、沈黙が流れ始めるが長くは続かなかった。「お姉ちゃん。早く次に行こうよ」 すっかり二人に興味を失ったマリアが、俯くエイプリルの腕を引く。エイプリルは軽く頷くと、何も言わずに踵を返した。その横顔は青白く、くちびるは本当に僅かであったが震えていた。シロにはそう見えたが、瞼をそっと落として、それを忘れた。 二人の少女が風のように駆け抜けるのをシロとクロは眺め、やがて二人も踵を返して家路へと向かった。 ここは白い街。何もかもが白く、白く、欠落している。

失っているからこそ今の幸せがある。それが白い街の法則だ。破ってはいけない。破ることは不幸に繋がる。永遠の幸せは風と共に散る。花が枯れるよりも早く、儚く、醜く。誰も何も言わない。言わないからこそ保たれている。暗黙の了解とも言うべきルールがそこにある。エイプリルはもう何度ついたかわからないほど、道にため息を落として行く。また一つ、また一つと増えていく。これがもしも塵ならば、今頃白い街は灰に覆い尽くされていることだっただろう。息が見えないものでよかった、とエイプリルは内心つぶやく。「お姉ちゃん、疲れてるの？」

覗きこむマリアは無邪気に尋ねたが、それがエイプリルの何かを刺激した。些細な棘が神経に触れ、苛立ちに似た想いが心をちくちくと攻撃したが、そっと治めた。ここで怒っても何もない。マリアは悪くないのだから。マリアは何も知らない。何も。エイプリルの妹だが、まるで別の人格なのだから。人格や心を綺麗に保つために導入されたプログラム。マザーはイマジナリーフレンドと呼んでいる。何かしらのトラブルでトラウマを抱えた人の記憶。辛いその記憶を抹消し、二度と浮上させないために別の人格にそれを請け負ってもらう——所謂二重人格のような存在がそれである。つまり、主人格ではなく記憶を請け負う偽物の人格、擬似であり人工二重人格者、その裏の、ということだ。それらがエイプリルであり、このマリアでもあった。エイプリルが体の主であり元の人格者、千春の守護者として誕生したのと同じく、マリアも作られた存在だ。だがエイプリルとは違い、マリアは主人格であり、守護する人格、名もなきイマジナリーフレンドはマリアの中で眠っている。たった一人で辛い記憶を抱えて。誰もその誕生すら知らず。マザーは言う。裏の人格が表を動き、主人格が裏で夢を見るのは成功とは言わない……皮肉にも、エイプリルが口にしたこととまるで同じことを言った。そうして、本来の成功の形であるマリアが誕生した。それ自体にエイプリルは何も思わない。マリアが生まれることに支障はない。ただひたすら、悲しかった。エイプリルはイマジナリーフレンドの第一実験体だ。千春は両親を目の前で殺され、目玉をくりぬかれた。否……目が欲しいという犯人の欲求が強すぎて、えぐられたショック死してしまったという方が正しいだろう。犯人は殺人狂ではない。目が手に入れば、後は不要。その後生きようが死のうが関係ない。だからこそ残酷だった。両親は伽藍の瞳をうつろに漂わせながら、ゆるりゆるりと死の沼に落ちていく。それを千春は震えながら、まぶたすら閉じることの許されない長い、長い時間を過ごした。千春はそれに耐えることができなかつた。当たり前だ。まして、千春にとって彼は見知らぬ存在ではなかつた。隠しようもない事実確実に千春を狂わせた。そうしてエイプリルは誕生する。千春が本当に狂ってしまわないように。イマジナリーフレンドに全てを押しつけ、夢の世界で平和に生きている。とても、幸せに。たとえそれが夢であろうとも。ありふれた日常を送っている。エイプリルは全てを知っていた。千春のことも自分のことも。イマジナリーフレンドという存在も。全てを知って、エイプリルはみんなと話す。マリアと話す。……彼と話す。「アザレ」 犯人の名を呼ぶ。同じ街に住む同じ人間として、エイプリルは彼を見上げた。辛い記憶を請け負うという使命を持って生まれたエイプリルにとって、彼と話す事は時折不快は覚えるが、発狂などなかつた。エイプリルは耐えうる人格なのだから。複雑なものを抱え続けるエイプリルの事など何も知ら

ないように、アザレは片手をあげ、楽しそうに近づいてきた。白い街とは不釣り合いの無精さがあるが、不思議と馴染んでいる。「よう、エイプリル。今日もいい目をしてるな」「あんたにあげる目玉は一つだってないよ」「はは。じゃあ、抵抗するお前を殺して奪うしかないか」冗談ともつかない調子でアザレは笑った。そして目をマリアに向ける。「ところで。見慣れない子がいるようだが?」「ワタシの妹」「マリアよ」物怖じしない性格なのだろう。マリアは堂々と一歩前に進み、胸を張ってアザレを見上げた。ハチミツの瞳が楽しげに瞬いたが、それはアザレにとって毒だ。エイプリルはすぐに二人の間に入ると、またもため息をついてしまった。「アザレは知ってるだろ?ワタシのこと。似てないけど妹ってことは」「なるほどな。新しい……ってやつか」その間に入るのは「実験体」という恐ろしい言葉だ。エイプリルは少し安堵した。アザレがここで何かを言ってしまうとおしまいだからだ。「マリアは何も知らない。知らないから、そのつもりで」アザレは鼻を鳴らすように返事をする、マリアから目をそらし、通り過ぎた。何も言わなかったし、エイプリルも何も言わなかった。マリアだけが不思議そうに小首を傾げ、エイプリルの服の袖を引っ張った。「お姉ちゃん。今の人?」「アザレ。あんまり近づかない方がいいよ」「そうなの?いい人そうだったわ」「人を見た目で判断すると痛い目見るよ」「そうかなあ」マリアは物欲しそうな子供のように指を食むと、エイプリルよりも一歩二歩先を歩いた。エイプリルも慌てて走るが、距離は縮まらない。マリアは鼻歌混じりだというのに、おっとりとした見た目よりもすばしっこかった。「ねえお姉ちゃん。マザーに聞いたの。この街の人ってみんな幸せなんですよ?さっきの人もそうなの?」「多分」この街でアザレは許されてる。その上、大好きな目玉を集める事が出来る。彼にとってそれは幸せなことなのだろう。「あと、大きな人と小さな人も」それがクロとシロであるなら、彼らは最も幸せな二人だろう。猫でいることで全てを逃れているシロと、全ての記憶を失っているクロ。そういうクロであるからシロは彼の傍にいるし、猫であり何も言わないシロだからクロは彼女と共にいる。住民の全てを知るエイプリルではないが、なんとはなしにそれを感じている。「お姉ちゃんも幸せなの?」千春の全てを請け負うことで誕生できたエイプリル。千春がトラウマを負わなければエイプリルは生まれなかった。エイプリルは瞼を閉じ、笑って見せた。それが本物の笑みか偽物かはわからない。嘘かどうかもわからない。だがこれだけは言える。「幸せだよ」――もし生まれなければ。死と同様、無であった。無であることは幸せだ。何もない。だが生まれてきた今は何でもある。なんでもあるからこそ、無である自分を傍観し、恐怖を覚える。生まれてきたことを喜ぶべきか。それとも悲しむべきか。今となってはわからない。それでも幸せなのは、白い街がそういう幻想を抱かせる場所だからだろうか。瞼を開ける。マリアの姿は随分と遠くに行ってしまった。風力タービンを目指しているのだろうか。彼女の足は止まらない。「マリアも幸せになるために生まれたのだろうか」誰に問うわけでもなく、ただ生まれた疑念を風に解き放つ。返ってくるものは何もないが、消えることもなかった。――マリアは全てを知らない。欠落したことすら知らない。なぜならマリアは主人格であり、請け負うイマジナリーフレンドがトラウマを抱いて眠っている。エイプリルは身震いした。誕生しながらも生まれていない、本物の妹を想って。

風に身をまかせながら、マリアは遠くの空を見つめる。薄い羽衣のような雲がたなびき、やがてどこかへ消える。すると新しい雲が追いかけるように渦巻き、やはり消えた。群青の空は何も言わず、ただそれを抱いて眺めている。無意識が途切れると、風力タービンの音がした。ふおん、ふおんと規則正しく回転する白い翼はカモメに似ていたが、ここには生き物らしい生き物がいないので比較することはできない。海を覗いても、エメラルドのような水面が広がるばかりで、波紋すら見えない。生き物の気配は感じられない。街を見ても同じだ。呼吸する音はない。広いのか狭いのかわからない、白さばかりが浮き立つ街並みは一人でいるにはあまりにも退屈だった。「つまんない」マリアは頬を膨らますと、堀から飛び降りた。特に何かを見たかったわけではないので、何もいないことは知っていたので、長居する必要はない。マリアにとって風力タービンも波のない海もただ青いだけの空も興味の対象ではなかった。制止した全てはマリアに何も与えず、ただここに立つ、街に馴染むことすら難しかった。白い色は好きではない。赤、青、緑、黄色、ピンク……様々な色彩の中で、様々な音と呼吸の中の渦が、ある日クラッカーのように訪れたら楽しいのに、と夢が、それすらすぐに飽きてしまった。マザーに許しをもらい、姉がいなくても外に出れるようになったのはようやく昨日の話だ。最初は喜んで外を駆けまわったマリアだったが、街のあまりの白さに呆然とし、幸せな人々の顔がどうも好きになれず、その日のうちに飽きてしまったのだ。だからといって塔に籠ってる気にはなれず、こうしてふらりふらりと歩くことにしたが、それにしても暇である。どうやっても暇である。さて、誰か遊んでくれないだろうかとか数人の顔を浮かべてみる。自他共に猫だというシロは愛らしい少女だが、なにせ気まぐれだししゃべることができないので、会話して暇をつぶすことはできない。クロは探偵という興味深い職業だが、どうにもうっそりとしていて苦手だ。アザレはどこに住んでいるかわからず、エイプリルはシロと同じく気まぐれなので中々捕まらない。塔の外で暮らす姉はあまり家に帰らないらしく（どこにいるかわからないが）かといって塔には検診以外訪れない。ぽつりと一人、空を仰ぎ、視線を落とす。道は白いレンガが不揃いにちりばめられている。他に見える色はというと目地の影しかなく、では周りかというと、白い家以外人の姿はない。風だけが動き、マリアの髪を攫う。日常とはこういうものだろうか。白いばかりで、何も見えない。気持ちばかりが大きく膨らみ、動き出す。決してはまるはずのないパズルのように、マリアの心は浮かびあがる。――そもそも、どうしてここにいるのか、わからない。ただ、ここに、いる。それだけのことがまるでわからない。ある日突然、ぽんと浮かんだ雲のように、マリアはマリアを意識した。それほど唐突に、マリアはここにいるのが以前からではなく、初めての場所だと認知したのだ。それは街というものを意識した時に生まれた。なぜ、この街を初めてだと思うのか。塔の中で生まれ、塔で育ったはずのマリア。十六年という月日、ずっと塔にいたのだろうか。なぜ街に来ることができたのだろうか。だが、塔にずっといたのだろうか。

この街に降り立つそれ以前はというと白濁としていて、覗くことはできない。塔の記憶はない。しかしマリアの表情は何一つ変わらない。笑顔すら、浮かぶ。通常の間人であればそれを不愉快あるいは喪失感で恐怖に襲われるかもしれないが、マリアにはそれがまったくなかった。漠

然とした暖かさばかりが混み上がり、不思議とそれを疑問に思ったり知りたいと思わなかった。それが異常であることすら、マリアにはわからない。わからないことばかりだが、それもやがては風に消える。後ろに振り返った瞬間には全てが消えていた。白い街の波は苦しみを全て攫ってくれる。だが暇であることは変わらない。どこまでも白く続く道。終わりのない壁。プラスチックのようにつるりとした表面を撫でながらマリアは走った。続く、続く、と胸中で呪文を唱えながら。いつかそれが消える日を待ち望みながら。そしてやってくる、終わり。唯一の出入り口である、遠く伸びた道。扉はなく、常に解放されている。「初めて見た」マリアは思わず口に出すと、驚きながらもその道を眺めた。囲まれた街に途切れた場所があるとは全く思っていなかったマリアにとって、そこは異質であったが、同時に羨望も湧いた。暇で埋め尽くされた中のたった一つ。白い普遍さが消える、長い道路。それを裏付けるように、出入り口の向こうはおぼろげだが灰色と黒が入り混じる世界が広がっていた。それが何かはわからなかったが、道の先にはどうやら何かがあるらしい。マリアは突然嬉しくなり、恐る恐るだが一歩ずつ進んだ。まるで悪戯する子供のように忍び足で進む。踏んだところでコンクリートの道なのだが、マリアは勝手にスリルを生んで楽しんだ。そう。そっと、歩かなければ、ウエハースのように崩れてしまう。「マリア！」あと一歩の所で外の世界が見える。最高潮に達した高揚は自分の名前と共に霧散した。マリアは反射的に体を止めると、まるで操られているかのようにゆっくり振り返った。突如不機嫌の色に染まった瞳には、わかっていたように姉の姿を捕らえた。「お姉ちゃん……」「マリア、何やってるんだよ。そっちは行っちゃだめだ」「どうして？ここ、外に通じてるんでしょ？私、外に行きたい。だってここは暇。とおっても暇で疲れちゃった」「マリア」エイプリルは語気を強めながらも、どこか諭す風にマリアを呼んだ。少年のようにも見えるエイプリルの顔は、今は違う。真剣というよりも、泣きそうな顔をしていた。目のふちは赤く、マリアだけを必死に映しこんでいる。恐怖に怯えているようにも見えた。あまりに違う姉の顔に、マリアは戸惑った。見たこともない――だが姉と呼ぶ存在はいつからいたのか、この顔は果たしてみた事があるのか――瞬にして様々な感情が入り混じったが、エイプリルが両肩を掴んだ瞬間、この思考も霧散してしまった。「マリア。お願いだから、そんなこと言うな。絶対に。絶対に言っちゃだめなんだ」「どうして……？」「崩れるから。ワタシたちの世界が、崩れるから……」「崩れる？」思わずオウム返しした声にエイプリルは答えなかった。ただただ、涙がうっすら浮かぶ目が水面のように揺らめくだけ。風力タービンの風が髪を攫うだけだ。「……わかった。ごめんなさい。でも、外の世界を知ってみたいかったの」「外は何もない。特にワタシたちには関係ない世界だから。あっちには……不幸しかない。沢山の恐怖しかないんだ」エイプリルは流れる黒髪を押さえながら、街の出口を眺めた。その顔は複雑だった。悲しみにも恐怖にも哀愁にも郷愁にも似ていた。マリアにわかる事は、エイプリルは負の感情しか抱いていないということだけだった。「帰ろう、マリア」エイプリルはいつもの顔に戻り、マリアに手を差し伸ばす。その手を受け取るが、気持ちは街の出口を見ていた。見たこともない色を含むそこは魅惑的すぎて、しばらく忘れそうにない。全ての思考が次々に消えてしまうマリアだが、それだけは残っていた。だからこそ尋ねてしまう。「ねえ、お姉ちゃん。一つ、いい？」「なんだ？」「マリアは、いつからマリアなの？どうしてか……思い出せなくて。どこかに落とした

みたい」 エイプリルは一瞬だけ、はっとした顔をした。だがそれも僅か一秒と経たずに消え、次には苦笑みを浮かべていた。今の姉はガラスのようだ。砕かれた万華鏡よりはるかに儚く、弱弱しく目を細めるのだった。「馬鹿だな、 MARIA は。 MARIA はずっと MARIA で、ワタシの妹だ。それ以外……何もない。なんでもない」「うん……」「嫌、なのか?」「ううん。違うの……」 またも思考が消える。もどかしいと思う気持ちすら。風力タービンの音が MARIA を消して行く。 MARIA はそれが恐ろしく思えた。何かとてつもなく重要なことを、 MARIA にとって大切なものが消えていくようで。なのにそれが愛しいまでに暖かく、幸せな気持ちが満たしていく。意識は次々と塗り替えられていく。 MARIA の好きな、沢山の色に。――否。幸せに、誤魔化されていく。 エイプリルは、姉はそれに気づいているだろうか。嘘ばかりの幸せ。無が幸せを与えてくれる?何もないから、不幸がないから幸せ?何を与えてくれるの。どうして姉は笑っているのだろう。街の人たちはみんな穏やかなんだろう……。ここは全てがまやかし。白い街は何も生み出さず、ただ生ぬるい空気だけが蔓延している。

今日も白い風が吹いている。染み一つない、漂白された風力タービン。これが白い幻影を生み出しているのか。街に充満している白い靄をゆっくりとかき混ぜ、広げているのか。ふおん、ふおんと揺れる羽は何も語らず、今日も何も生産しない。ただただ、心地のよい風だけが送り出される。日夜問わず回り続ける白い羽根を MARIA はじっと目に焼き付けた。そうしていないと、風力タービンを疑うということすら忘れてしまう。幸せという水が、疑問という泥を流すように。流され蓄積された泥は MARIA の体内のどこかでうずくまり、何かを生み出そうと、ひっそりうごめいている。「忘れることで私は幸せなの？そんなの、嫌。忘れたくないの」風力タービンに問いかける。無論、答えは返ってこない。だが MARIA の瞳には決意の色が揺らめいていた。ろうそくのようなともし火であろうと、火の熱さは変わらない。どれくらいそうしていただろうか。風力タービンから目をそらし、空を仰ぐ。何も生み出さな羽、何も生み出さない海、そして空もまた何も生み出さない。今は夜だ。みんな寝静まっている。月も星も眠ってしまったのだろうか。藍色のスクリーンはゆるりゆるりとたなびいている。時間の経過だけが存在していた。

MARIA は急いで踵を返し、白い床を蹴って走った。忘れてしまわないうちに。そして、マザーに見つからないうちに。MARIA にとって一日はとてつもなく長い長い時間だ。朝昼夜変わらず、単なる時間の流れに過ぎない。仕事や学校などの決められた動きはなく、白い街の住人もまた同じく、ただただ時間を過ごす。MARIA はそれが暇でたまらないが、姉はそうではないらしい。朝はまどろみ、昼はシロや街の住人と話、夜もまどろみ、眠る。姉だけではなく、他の住人もそうだった。それが当たり前なのだ。MARIA はそれをしなかった。ひたすら白い街を網羅し、暇の抜け道を探していた。だが見つからなかった。暇をあまりにもてあますと、今度は幸せがやってくる。その瞬間、MARIA は最も恐怖を感じるのだが、すぐに甘い幸せがやってくるので忘れてしまう。だがまた訪れると、以前味わった恐怖も蘇り、さらに恐ろしくなる。恐怖という恐怖が重なり、忘れていた今もどこか恐怖を肌を感じていた。だからこそ、MARIA はマザーの塔からこっそり抜け出した。夜は外出できないのだが、恐怖を払拭するのは今しかない。幸せになってしまう前の今と、この夜という白くない空間でしか。まずは探すしかない。MARIA が落としてしまった「何か」を探す。そのためには探偵が必要だ。「ねえねえ、起きて。私よ、MARIA。お願い、起きて」駆け抜ける足はクロの家を訪ねた。白い街は無防備だ。扉に鍵はなく、開けて無断で入ったとしても住民は叫ぶことも恐怖に戦慄することもなければ、驚くことすらなかった。クロも例外ではなく、ベッドからむくりと起き上がると、ぼんやりと MARIA を凝視した。辺りが暗いせいか、クロは真っ黒で、漆黒の瞳だけが輝いている。「MARIA……？なぜ、こんな時間に」徐々に驚きを示すクロの隣で、シロが目を閉じたまま起き上がった。寝ぼけているのだろう。顔をしきりにこすり、舐めている。MARIA はシロを見て思わずぎょっとした。幼い女の子は衣服を纏っていなかった。真っ白な体は何一つ隠さず、まだ凹凸のない体をさらけ出している。薄闇の光がなだらかな輪郭を浮かび上がらせ、少女とは思えぬ淡く優美な輝きを放っていた。まるで妖精が羽化したような、生まれたての透明な羽を彷彿とさせる。よくできた作り物にも見えたが、何度見てもシロだ。そんな幻影はすぐに消え去る。クロは事もなくシロを無理

矢理布団中に押し込んだ。シロはそのまま寢息を立て、夢の世界へ飛び立った。数秒の出来事だが、マリアの目にははっきり記憶されてしまった。「こいつは服を着るのが嫌いなんだ」猫だから、とクロは付け足したが、マリアは納得できなかった。確かに、シロは猫である。それは認めた。クロとシロは随分と年が離れている（クロはいくつかわからないが、恐らく二十歳半ばを過ぎているだろう）し、お互い飼い主とペットと認識している。……と、エイプリルから教わっている。それも認めてはいるが、シロは猫である以前に人間で、女の子だ。いくらなんでも羞恥心が芽生えている年齢であろうにも関わらず、それが猫であるという理由で済んでしまっているのだろうか。マリアの混乱は長引いた。「……用がないなら、帰れ」「ち、違うの」クロの声でようやく我に返ると、マリアは両手を振った。「探し物をしてほしいの。あなた、探偵なんでしょ？お姉ちゃんに聞いた」「こんな夜中に見つけてほしいものなんてあるのか。寢床か？それとも、眠る方法？」「ジョークを聞きたくて来たわけじゃないの。お願い、私、真剣なの」「真剣だったら、朝にしてほしい」「こんな時間に来てしまったのは謝るわ。でも、早くしないと……忘れちゃうの。どうしてってという疑問が、消えちゃう」クロも上半身は何も身につけていなかった。近くにかかっていた上着を手にとると素早く着こみ、近くにある椅子に腰かけた。マリアはほっとして、クロの目の前に座った。「私、自分が何か知りたい。どうして忘れちゃうのか。なのにどうして幸せなのか」「それは悪いことなのか？」「だって、怖いじゃない。よくわからないのに幸せって。何かあるから幸せじゃないの？」「幸せは形じゃない」「知っているわ。違うの。もっと、漠然とした……ううん、こういう漠然じゃないの。根拠のある推理、みたいな根っこが欲しいの」クロは面倒そうにテーブルに肘をつき、頬杖をついた。その顔に表情はないが、話はまだ聞いてくれるようだ。「不安、なの」マリアはいつの間にか俯き、スカート裾を握りしめていた。白い手は僅かに震え、体は小さく縮んだ。こんなにも幸せなのに。穏やかな波が怖い。だがこの感情も、数秒立てば消えてしまうだろう。そして思い出すのだろうか。夜でもひたすら働く、風力タービンの音色と共に。繰り返し、繰り返し。風力タービンのように忘れてしまえばいいのに。クロはしばし黙って、マリアの言葉を吟味した。表情も体も動かなかったが、心は何か動いているように見えたのはマリアの気のせいだろうか。ようやくしてクロは姿勢を崩し、前かがみにマリアを凝視した。「俺は何も持っていない」「それも、少しだけ聞いた。記憶がないんでしょ？怖く……ないの？」「何も。怖いという感情すら俺は持っていない。俺が持っているものは弾丸とシロだけだ。俺はそれさえあれば十分だと考えている。幸せかどうかと聞かれば多分、幸せな部類だろう。ここは何もない。恐ろしいものすらないはずだ」名前の通り、真っ黒な瞳が輝いた。マリアを諭すような目は姉であるエイプリルと同じだった。満たされているのだ。だからマリアのことがわからない。それでもいいから、とマリアは拳を固めた。「じゃあ、探してくれないの？私の幸せ」「逆に聞く。今の何が不満なんだ？」マリアは一瞬言葉に詰まったが、だがすぐに答えた。「穏やかすぎて怖い。何もなくて、暇で、怖い。前は……いつに対しての前かわからないけど、うんと昔はもっと色々あった気がするの。でもそれを思いだそうとすると突然心があつたかくなって、幸せな気持ちになるの」「それでいいじゃないか」「お願い。堂々巡りしないで……。だから不安なの。いいことなんて一つもないのに、幸せな気持ちになるの？甘いお菓子も食べてないのに」小声だった言

葉はいつの間にか大きく張り上げていた。ベッドで寝ていたはずのシロはいつの間にか起き上がり、じっとマリアを眺めていた。その視線に気づくと、マリアははっとした。七色に光るシロの光彩がマリアを責めている。いつも見せる楽しそうな瞳は異形を見るようにマリアを見ている。舌一一睨んでいる。奥底の暗い瞳孔がマリアを刺す。「シ、シロ……。見ないで」裸体を浮かび上がらせながら、シロはゆっくりとマリアに近づいた。恐ろしいことなど一つもない。目の前にいるのは猫と信じている裸の少女。天使のような白くふんわりとした髪は嵐の前兆のような、暗い雲に見える。シロはマリアに顔を近づける。鼻と鼻が触れ合うほどすり寄ると、歯をむき出した。声はもちろんない。だがその口は明らかに「帰れ」と訴えている。それどころか、強く叫んでいるようにも見えた。「ご、ごめんなさい！帰るわ！おやすみなさい！」マリアはシロを軽く突き飛ばすように後ずさり、急いでその場を後にした。転げそうな体を必死に進ませ一一いつしか足音は消え、いつもの白い世界が広がる。マリアは走った。マザーのいる白い塔、そこにある自分の部屋を目指して。ただ走る。風力タービンの音が後ろからついてくるが、耳には入ってこなかった。今あるのは穏やかな高揚。走っているうちに暖かくなった体は楽しそうに踊り始め、心はいつの間にか満たされていた。そうだ。私はいつだって幸せ。なのに。

薄墨広がる闇夜でも、風は白く見えた。凍える空に吐く息のように、生ぬるい風力タービンの風は白く、エイプリルの頬をかすめた。エイプリルは星の数を数えながら壁に寄りかかった。隣には窓があり、レースのカーテンが柔らかくはためいている。それはこの家の主人には到底似合わない代物であるが、もちろん、彼の趣味で取り付けられたのではない。元々家の付属品としてカーテンはあった。エイプリルはそれを知っているので何も言わない。代わりに、違う台詞を口にした。「マリアが、いないんだ」カーテンの奥は暗い。それもそのはず、白い街は眠りに落ちていた。だが闇夜より暗い影がもそりと動き、窓枠に寄りかかった。「お前、俺の事嫌いなんだろ？」くつつつと笑いながら出てきたのは、アザレだ。いつものくたびれた格好のままということは、さしずめ、コレクションを眺めては浸っていたのだろうとエイプリルは予測しているし、その通りだろうと確信している。その中に千春の両親のものもあるだろう。嫌悪を抱きながらも真っ先にここにきたのは、マリアがすでに餌食にされていると考えたからだ。マリアの瞳はハチミツみたいにおいしそうで、彼の好み通りの色をしている。決して――それ以上の思いはない。「……いないんだ」夜になると不意に気温というものを思い出す。昼間には感じられない、寒さというひもじい思いがこみ上がり、エイプリルは両肩をさすった。温まるはずがない。体も心も凍ったままだ。朝にならない限り。白い色を思い出さない限り。幸せの色を思い出さない限り。「マリアは塔にいるんだろ？」「あいつ、勝手に出てったみたいなんだ」「だからと言ってこんな夜更けに来たら危ないだろに。無防備なお嬢さん」「ワタシに言ってるのか？気持ち悪い言い方するなよ、アザレ。長居したくないんだ。くだらないこと言わないで、マリアについて教えろよ」「つれない奴だなあ」そう言って頬杖をすると、心の底から楽しそうにくつつつと笑った。通常の人となんらかわりない、人懐っこい笑みはアザレが犯罪者だということを一瞬だけ忘れさせてくれる。だがエイプリルは警戒を解かない。気を緩めれば、自分という意志がなければ、千春が飲み込まれてしまう。役目を忘れた自分は消えてしまう。エイプリルは首を振った。そんなエイプリルを見透かすように、アザレの赤紫色を帯びた瞳がぬらりと輝いた。月は出ていないというのに。「知らないし、ここにはいない」「わかった。じゃあ、どこにいるんだろ。知らないか？」またしてもアザレは笑った。肩をゆすり、目を細め、誰もが思わず信頼してしまうような、柔らかい顔をした。だからこそエイプリルはアザレを見なかった。千春が崩壊してしまう、信頼を抱いてしまう。「お前、俺の事が嫌いなのにそれを聞くか？長居したくないんだろ。それとも、お前は別の事を聞きたいんじゃないか？居場所よりも別の事を」エイプリルは自分の足を見た。自分、とはいえ、エイプリル自身は実体をもたない。思考する意識に過ぎないのを、千春という少女の心を守るために体を与えられた。初めて「大地」を感じた時、自分という存在が生まれたという嬉しさ、幸せはとても口で言い表せない。形のない、浮遊していた意識がこうして大地にくつつくと、すっかり離れられなくなってしまった。今を、ここで、生きている。想う事の嬉しさ。この風のようにただ浮かぶだけの存在に戻るのには、すでに恐ろしいと感じている。アザレのことをどう想おうと、マリアのことを探さなくてはならない。ここが破壊されないためにも。「来たくて来たわけじゃないし、何か言いたいわけでも

ない。ただ……残念すぎることに、あんたしか話せないんだよ。ワタシたちの事を知ってる、あんたじゃないと」 アザレは何も言わない。エイプリルはさらにアザレを見ず、寄りかかったまま遠くをぼんやり眺めた。「マリアがいないんだ。多分この街をふらふらしてるんだと思う」「何回も聞いた。別にいいじゃないか。マザーに怒られるだけだろうよ。エイプリルに被害は及ばない、はずなんだろう？」「そんなはずないって、わかってるんだろう？マリアがいなくなったって事は、何かを考えて行動してるって事だ。たったそれだけの行動だけど、あんたは何か予測してるんだろ。だから笑ってられる。わかった顔して、何も言わない。嫌いだ。死ぬほど嫌いだ。アザレなんて捕まればいいんだ」「酷いなあ」 アザレは柔らかい調子を崩さなかったが、目の端が歪んだ。複雑で読解不能の笑顔だが、注ぐ眼差しは優しいことは肌で感じる。疲れがじわじわとエイプリルの手足を這う。話をするのはそろそろ限界だ。なのに口は続けてしまう。「……変なんだ」「何がだ？」「幸せを、疑問に思ってる」 再び、風が髪をさらった。エイプリルは耳にかけると、視線をゆっくりと地面に落とした。デコボコの白いレンガ道は今は暗い。目地はさらに暗く、湖に辛うじて浮かぶ石にしがみついているような錯覚を覚えた。エイプリルは急いで首を振ると、ようやくアザレを見た。彼は案の定、にこにここと笑って頬杖をつき、エイプリルを眺めていた。「アザレ。あんた、幸せだろ？好きなだけ目玉を抉って飾ることができるんだから」「そりゃもう、幸せさ。お前の目玉もいただけるのなら、さらに幸せ」 アザレは手を伸ばすと、エイプリルの顎を無理矢理上げた。エイプリルは拒絶することなく、されるままにアザレの瞳を見た。赤くも紫にも見える、ルビーのような瞳はアザレの中で唯一きれいだと言えるパーツだった。「自分の目玉でも抉ってるよ」「それはほめ言葉かな？」「……ワタシの目はすでにあるだろ。両親と同じ目なんだからな」「残念ながら、親と子とはいえ色が微妙に違う。年齢によっても違うしなあ。それを世代別に、グラデーションに並べるとたまらなくきれいだぜ？」「気色悪い。欲しいならもってけよ。殺すなら殺せよ。ワタシは最初からいなかった存在なんだから」「そう、自暴自棄みたいなこと言うなって。大丈夫、殺しはしないさ。別に殺したくてやってるわけじゃないんだ。目玉を抉るショックで、死んじゃうだけさ。それが返って、残虐な方向に行く。エイプリル。そんなに幸せが怖いかな？」 アザレはようやく手を離し、エイプリルも引きちぎるように身を離れた。アザレは笑みを変えぬまま、じっとエイプリルを見つめた。「怖いもんか」「昔な」 アザレは唐突にエイプリルの言葉を遮った。笑顔は崩れていないが、片頬が引きつっている。薄いくちびるが引き伸ばされ、化け物じみて見える。エイプリルはここが寒いことを思い出し、それでも目をそらさず、両肩を抱きしめた。「ガキの目玉を抉る時だったかな。そのガキがさ、言ったんだ。おじさんは、生まれてきてよかったと思う？ってさ。子供にしては怖いジョークだろ？」 エイプリルは思わず顔を歪めた。子供にまで手を出した部分にか、それともその質問にか。エイプリル自身もよくわからず、ただ嫌悪を覚えた。アザレは続ける。「俺は答えた。生まれてきちまったもんはしょうがないだろ？って。それを後悔するかどうかなんて、本人にはわからない。お前だって、そうだろう？」「……生まれてこれたことは幸せだって、マリアを見てると余計に思う。だって……本来……本当のワタシの妹は、イマジナリーフレンドは……暗い記憶を持ったまま、マリアの中で眠ってるんだ。生まれてきてるのに、死んでるみたい。つらい記憶だけ押し付けられて、自我もない」「それを幸せかどうかは本人の間

題でお前の問題じゃないだろ？」　そうだけど、という言葉は消えた。エイプリルは口を噤むと、そのまま何も言えなくなってしまった。言いたい言葉は沢山ある。だがどれも形にはなっていない。曖昧な白い靄となって、いつまでもエイプリルを覆う。「部屋に入れって。寒いんだろ」

エイプリルは顔をあげ、横目でアザレを見た。くたびれた中年のような線の細い笑みは暗闇でもよく見えた。エイプリルも思わず片頬で笑うと、肩をすくめた。「優しいおじさん、ありがとう。でも、マリアはここにいないんだ。それで十分。それに、あんたはヴェルミヨンがいるだろ？一緒にいたら、怒られる」　今度はアザレが肩をすくめる番だ。またも片頬で笑うと、目を細めた。「俺は確かにヴェルミヨンが好きだが、好きなのは目玉だけさ。目玉を捧げてくれたっていう点が好きだな。信条ってやつもな。そうすると、ああいうのを愛情って言うのかね」「本人に言えよ」「あいつも知ってるさ。どっちかって言えば、俺たちは利害関係に近いのかもな……。ある意味、恋愛に近いかもしれない。けどお前は違う。目も、性格も、姿も。俺はヴェルミヨンよりお前の方が好きだよ。だから、来いって。不安なんて持ってたら、マザーに殺されるぞ」　顎をさすりながら見つめてくる目は狩人に似ていた。エイプリルはくちびるだけで笑うと、窓枠に手をかけた。「あんたがワタシの不安を解消してくれるって？思い上がりもいい加減にしろよ。あんたにワタシの何がわかる」「事情くらいならわかってるつもり」「わかっててそんな事言うか？とんだ変態だ。ワタシは千春を守る、少年型的人格なんだぜ？少年少女趣味もいい加減にしないと、それこそマザーに殺される」「それは困る。まだコレクションが集まってない。死ぬのはその後にしていただきたいね」「大体、子供に興味ないって言ったじゃないか」「そうだったか？記憶にないな」　大きな手のひらがエイプリルの小さな頭をすっぽり包む。そのまま固定されると、視線と視線が痛いほどぶつかった。アザレの瞳はますます鮮やかに色づき、輝き、エイプリルの中へ中へと入り込む。「いいじゃねえか。お前の目を一晩中眺めさせろよ」「嫌だ。マリアを探したい。ワタシは消えたくないんだ」「じゃあ、挟らせろ」「ワタシがうんと死にたくなったら」　台詞は最後まで言えなかった。悲しいまでに強い力がエイプリルに降り注ぐ。悲鳴も恐怖も愛情もなく、無感動の心だけが宙を舞い、暗闇に落ちた。アザレの腕の中でエイプリルは抵抗も忘れ、悲しく、悲しく、妹のことを考えた。マリアは幸せなのだろうか。いつになったら朝が来るのだろうか。　白い街はまだ目覚めない。闇夜にそっと、隠れている。

今が昼なのか夜なのかまるでわからない。街の中央にそびえたつ塔の内部は、いつだって煌々と明かりが付いている。白濁した蛍光灯は真っ白な壁や床をさらに白く発光させ、輪郭をぼかす。石膏像にも似た柔らかい線は、しかしその実、そんなに穏やかなものではない。冷たいエッジばかりがきいている。家の中を思わせる家具や愛らしい小物など無駄を徹底的に省いたその場に、エイプリルはそっぽを向き、マリアは今にも泣きそうになりながら並んでいた。目の前にはマザーがいるが、並ぶ二人と彼女の様子は、向かい合うという穏やかさよりも、対峙するという風であった。学園に通う千春なら、この様子を廊下に立たされた悪生徒と思うであろう。二人の考えることなど手に取るより簡単だと言わんばかりに、マザーは眼鏡を押し上げた。表情はまったくなかったが、たるんだ頬はわずかに苦味を含んで見えたのは、エイプリルの気のせいだろうか。動くたびに舌打ちしてるように肉が波打った。「マリア。夜、勝手に出て行ったわね。どこに行ったの」抑揚はないはずだが、一言一言ははっきりと聞こえる発音はマリアを責めているとしか思えない。奥底で光る青い双眸はエイプリルとマリアを威圧し、二人は俯いた。だがマザーはカルテを片手に、二人を見ずに続けた。「あなたはまだこの塔の管轄にあるんだから、勝手に出てはいけない」「ご、ごめんなさい。もっと、外を見たくて……」「夜中に？昼間、散々外で遊んでいるでしょう。困った子ね」微塵もそう思っていない淡々とした口調は、マリアをさらに怯えさせた。だがマリアに対する咎はそこで終わり、あっけないものであった。次はエイプリルだ。たるんだ肉がエイプリルを見るのがわかる。ほの暗い青い瞳はじっと、睨んでいるに違いない。表情はないはずだが、マザーの眼力は恐ろしく強い。「エイプリル。あなたも夜、いなかったわね。外出センサーが働いてたわ」エイプリルは嫌々、マザーを横目に入れた。エイプリルも負けずと睨んだが、勝てるはずはない。だが言葉を弱めることはしなかった。「ストーカーかよ。だったら、わかってるんだろ？ワタシの居場所なんてお見通し。どこで何をやるうとも、あんたの耳に入る。聞くだけ無駄じゃないか」「口調を正しなさい」気だるげに「はい」とだけ返すが、マザーはまだエイプリルを睨んでいた。威圧から非難へ色を変える。マザーはため息混じりに片手で額を押さえた。大げさな仕草だった。「エイプリル。アザレの元を訪れるのは構わない。何を話してもいい。肉体関係を結ぶのも許すわ。合意であろうと、無理やりであろうと。それによって千春が目覚めることも傷つくこともないのなら、あなたは最高ね」皮肉のつもりだろうが、文字通りエイプリルは最高だと認識している。どんな行動であれ、どんなに不愉快であれ、アザレが恐ろしくも腹立たしい存在とはいえ、それら全てはエイプリルのものだ。夢を見ている千春ではない。主人格の千春ではない。イマジナリーフレンドの自分こそが、今を生きている。千春が知ったら羨むだろう。千春とアザレは顔見知りで、それ以上に、千春はアザレが好きだった。近所に住むお兄さんは優しく、人懐っこく、しかし――確実に目玉欲しさに――近づき、単純で何も知らない千春はアザレに惹かれた。たったそれだけの想いとそれ以上の狂気。砕かれ、踏みにじられ、エイプリルは誕生を手に入れ、アザレはこの地で思う存分コレクションを眺める権利を手に入れた。そんなことを千春は知らない。未だに近所のお兄さんに憧れを抱いている。実際の体は、すでに彼のものだということに。最高の皮肉にして、最悪のプレ

ゼントだ。顔は歪み、笑うしかなかった。「はは、そうさ、ワタシはいつだって最高だよ、マザー。ワタシはこうしているんだからな！」「馬鹿な事言わないで。数値が不安定よ。あなたは体は女でも、人格としてのカテゴリは男。少年なのだから」「ワタシはワタシさ。カテゴリなんて、性別なんて関係ない。そもそも、ワタシに男女の感覚なんてない」「エイプリル」ようやく感情を伴った低い声に、さすがのエイプリルも出過ぎたと首をひっこめた。これ以上逆らえば、これ以上余分な事を言ってしまうえばエイプリルは終わる。人格は殺され、千春は表へ出る。もしくはまた別の人格が与えられ、千春は守られるだろう。どちらにしても、エイプリルは消される。まだ死にたくない。死にたくなかった。消えるという感覚が恐ろしくて、元々存在してなく、誕生すら知らないエイプリルにとって消失は恐怖すぎた。口の中が渴いている。エイプリルは辛うじて唾を飲み込むと、くちびるだけで笑った。「二人共、今日は塔から出てはだめ。わかったわね」有無を言わさぬ声に二人は頷いた。今日は風を感じる事ができない、それだけでエイプリルの心は沈んだ。ようやくマザーから解放された二人はとぼとぼと、廊下を歩いていた。ロビーとは違い、個室の並ぶこの階——エレベーターの止まらないとある階の廊下は特殊な絨毯が敷いてある。起毛の短いオフホワイトの絨毯なのだが、足音が一切しない。絨毯特有のさくさくとした感触はあるものの、その音すらしない。歩く度に生氣すら吸い取られてしまいそうな感覚に陥り、それもあってか、エイプリルはここが嫌いだった。生まれ故郷であり、生まれて数年は暮らしたが、いい思い出は特に見当たらない。悪い思い出も特にないのだが。「お姉ちゃん」さほど長くない廊下なのだが、随分と沈黙し、随分と歩いていたように思える。エイプリルは顔を横向け、立ち止まってしまった妹マリアを覗きこんだ。マリアはすっかり萎れてしまい、愛らしい瞳はまつ毛に閉ざされている。くちびるはとがるばかりで、笑顔はなかった。「どうした？」「私、変なの。お姉ちゃんに聞きたい事沢山あったのに、忘れちゃう」「忘れる？」「そう。忘れる……というより、疑問が全部幸せな気持ちになっちゃうの。今だってそう。お姉ちゃん……人格って何？えっと、あとは、アザレさんと……その」マリアは僅かに顔を赤らめたが、エイプリルはあっけらかんとしていた。すでに日常茶飯事なのだ。「アザレは少年少女趣味で、相手をいたぶって無理やりねじ伏せるのが大好きな狂人さ。ワタシは単なるあいつのはけ口。ワタシの目を見ているのが好きなんだそうだ」「目？よくわかんないけど……お姉ちゃんはアザレさんが好きなの？」「まさか。死ぬほど嫌いだ」けれど、千春は好きだった。くたびれていて人懐っこく明るいアザレのことを。そしてアザレも千春の目が好きだった。当然のように、両親の目も好きだった。アザレはたまらなく偏執的な人間であった——惹かれあっていたはずの両者にはほんの僅かな歪みがあり、すれ違いがあり——本当に数ミリしか違わないこの交差が、悲劇を生む。そして、エイプリルを。「大嫌いだ」抵抗する両親の目を生きたまま抉り、そのまま殺した。怯える千春の目の前で。そんな千春を、ショック状態の千春をアザレは襲った。アザレは殺人狂ではないと言っている。だが、捕まえた獲物をいたぶることも忘れない。震える瞳孔が好きなんだ、と言っていた。殺人狂の方が遥かにましだ。二人は狂ったダンスを踊るしかなかった。死なない限り。そして、そして——こんなにも美味しく調理された人材を、マザーが見逃すはずがなかった。千春にとってアザレは起爆剤。それを抑え込むのはエイプリル。マザーはこうして試しているのだ。エイプリルがどこまで辛抱強くいれるか。千春

に永遠の幸せを与え続け、なおかつ自分も幸せでいることができるか。きっとこうした日々が、生きているという実感を与え、エイプリルを幸せにしている。「その他質問は？」「あ、え？」

　　マリアは驚いたように目を見開くと、力なく、だが愛らしく微笑んだ。「ごめん、お姉ちゃん。なんだっけ？」　　マザーは迂闊な奴だ、とエイプリルは思っていた。何も知らないマリアの前で堂々と話すので、そんな事まで話していいのかと、少しだったが驚いたのだ。だが結果はこう。マリアは何も知らない。記憶するということが欠落していた。ぽかんと空いた空間には、代わりに幸せが詰まっている。まるでこの街そのものだ。白く、白く、塗り替えられる。疑問は全てペンキの向こう。白く消える。「お姉ちゃん。一緒にお風呂入ろうよ。おそろいのパジャマ着て、同じベッドで……夜はずっと話そうね！」　　元の快活な笑顔が戻り、エイプリルも笑顔でそれに答えた。マリアも欠落している。だからこそ幸せだ。　　だが――誰もが思わない「疑問」を持っている。エイプリルはそれが怖くて仕方がなかった。厚く塗り固められたペンキは、いつしか剥がれる、そんな運命を孕んでいるに違いないのだから。